

ぽん、ぽん、きゅっ

蜜瀬かえで 著

いつもの朝の通学路。

いつもの目抜き通りで。

「未佑くっ」

「――玉置？」

いつもと違うことが一つ。

珍しいことに。

玉置が後ろから走って来るではないか。

わたしたちは家が全然反対方向なのに加えて、玉置ってば、いつも始業ギリギリに登校してるみたいだから。こうして朝に会うのって、すごく珍しい。

というか、今日が初めてかも。

「おはよ、玉置。珍しいね」

ともあれ、まずは朝の挨拶。

そしたら玉置も、

「うん、おはよ、未佑」

ずっと走ってきたのか息を整えながら、

「後ろのここ、寝ぐせついてる」

自分の頭の後ろのほうを指さしながら言った。

「え、うそ？」

どこだろ。家を出るときには全然気がつかなかった。

自分でも手を当てて探してみるけど中々見つからなくて。

見かねた玉置が、

「ここ」

前から手を伸ばし、わたしの頭の少し後ろのほうを押さえる。

「ちよつと、待ってね」

そう言いながら、

「……ん、なかなか直んないなあ」

わたしの髪を何度も撫でつけて、

……なんでだろ。

寝ぐせ直してもらってるだけなのに。

玉置の顔がいつもより近いせいかな、なんか、ちよつと照れくさいや。

それをごまかすように、

「今日は、玉置、早いんだね」

わたしが言うのと、

わたしの寝ぐせを押さえつけながら玉置が、

「なんかねー。朝の支度してたら、急に『今出発すれば未佑に会えるぞ』って気がして。そのまま急いで家を飛び出してきちゃった。——あ、もしかして、この寝ぐせからピピって電波が出てあたしに知らせてくれたのかも」
そう言って、わたしの寝ぐせから自分のくせつ毛に向かつてピピピを指で表現する。

「——ふ。なにそれ」

その仕草におもわず吹き出してしまつて。そのときに気がついた。

（玉置、それだけ急いできたからかな？ 襟もタイも曲がつちやつてる）

「ちよつと玉置、動かないでね」

「ふえ？」

頭を押さえられたまま、玉置の襟元に手を伸ばしたら、

「わひゃ」

「あ、こら。動くな」

『『動くな』って言われても。何、いきなり』

「襟が曲がつてるの。あ、こら、また」

「そう言われても。あ、またハネた。未佑こそ動かないでよ。髪直らないじゃん」

「じゃあ、せーので止まるよ。——せーの」

「っひゃ」

「あ、ほら、やつぱり玉置のほうが動く」

「……だって、首もと触られるの苦手なんだもん」

「もう、そんなこと言ってたなら、いつまでたっても直ないでしょ」

「いいよ、もうこのまんまで」

「だーめ。ほら、シャンとして」

その後も。

くすぐったがる玉置をなだめながら。

襟と髪を直しあつたわたしたちなのでした。

風薫る初夏の朝。